彼女と手紙

彼女と手紙

これは昭和中期の女学校を舞台に、三人の少女の出逢いと友愛を描いた少女小説。

《本書はゲーム本編の核心部分に深く関わりのある内容が書かれておりますので、必ずゲームクリア後にお読みください》



見ゆるかぎり彼のあとを追ひしわが目は、
これを見るをえざるに及び、さらに大いなる
願ひのめあてにかへり來りて
全くベアトリーチェにそゝげり、されど淑女
いとつよくわが目に煌めき、
みるちからはじめこれに耐へざりしかば
わが問これがために後れぬ。

『神曲』天国篇第三歌より

彼女と手紙

Letter with Beatrice.

*** 和 ***

私立櫻羽女学院は保谷市の端にある中高一貫校です。東京中――いや、全国からこちらで学びたいと志す少女達が集って来ています。和（なぎ）もそのような少女のひとりでありました。

親元を離れおよそ一年、この武蔵野の地で二度目の春を迎えようとしています。

染井吉野の舞い散る緑道を、和は学院へと急いでいました。春眠とはよく言ったもので、久し振りの登校日に少しばかり寝坊をしてしまったのです。

校門をくぐり抜け、校舎の入口へと急ぎます。櫻羽女学生たる者、何時如何なる時であっても服装の乱れがあってはなりません。駆け足に成る手前の早足で和は歩いて行きます。

下駄箱が並ぶ入口で上履きに履き替えた時でした。上体を屈めた拍子に、小脇に抱えていた鞄から文庫本がこぼれ落ちたのです。

「あ――」声を上げる間もなく、パサリと簀の子の上に本が落ちました。

カバーが外れ、栞も頁から離れてしまったのです。

何処まで読んでいたかは覚えているので問題は無いのだけれど――。

拾おうと和が身を屈める前に、すぐ傍に居た女生徒がしゃがみ込みました。

そうして文庫本と栞を拾い上げてくれたのです。
「……あ、ありがとうございます」和は小声でお礼を述べました。
元来人見知りの気がある和は、家族でも無い限り、例え相手が同年代の少女であってもおいそれとは話し掛けられないのです。
ましてやそれが今まで全く話した事も無い女性であれば――
「どういたしまして」彼女は和に向かって微笑みました。
「クリスティなんて読むんだ。私はエラリィ・クイーンの方が好きかな」
「……ま、まだ読み始めたばかりなの」和はそう言って首を振りました。彼女が探偵小説を好んでいそうなのは判ったけれど、深く詳しい事を話されても和にはついていけません。
「そう。だったら、楽しみは後にとっておいた方がいいね」彼女は目を細めて笑ったのでした。
「……そ、それでは」彼女の笑顔から目を逸らして和は踵を返し――。
「あ、待って」声を掛けられて立ち止まりました。
「な……何でしょうか……？」
振り返った和のすぐ目の前にまで彼女は迫っていました。思わず息を止めて仰け反った和の胸元へ彼女は手を伸ばしてきたのです。
「ちょっと動かないでくれたまえ。……リボンが乱れているから」

動かないでもなにも、和はずっと身体が硬直したままでした。
彼女の指がほどけかけた和のリボンを結び直していきます。激しくなる自分の鼓動が彼女に伝わってしまわないかと気が気ではありません。
「先生に見付かったら注意を受けてしまうからね。――はい、できた」彼女は軽く手を叩いて離れました。
「……あ、ありがとう」和はそれだけしか言えませんでした。
「クラス替えの掲示は見た？」「いいえ、まだ――」掲示は確か、入口の先にある小ホールでしている筈です。
「じゃあ一緒に見に行こうか」彼女はそう言って和の手を取りました。
「あっ――」逡巡する間もなく手を引かれ、和はつんのめるようにして彼女に連れて行かれたのです。
小ホールには生徒達が集まっており、奥にある掲示板を見詰めて歓声をあげたり、落胆の声を零しています。それは貞淑をよしとするこの学園には珍しい光景でした。
「――あ、和さんの名前があるよ」彼女が掲示板を指差します。
和は彼女が自分の名前を識っていて呉れた事に驚きながら、その指の先へ視線を走らせました。
二年藤組。それが、和が今日から所属する事になるクラスでした。「ああよかった。私達も同じクラスのようだよ」彼女は和の肩に手を載せて大きく頷きました。

彼女の名も、和の名前が書かれている少し上にありました。
「これから宜しく、和さん」差し出された手を和は怖ず怖ずと握りました。そうして、
「……こちらこそ、宜しくお願いします」と蚊の鳴くような声で返したのでした。

＊＊＊　春花　＊＊＊

新学年の授業が始まりました。春花は自分の座席から教室を眺めていました。白い制服に黒い髪。昨年から代わり映えのしない光景。
右隣の席へ首を巡らすと、其処には幼馴染みの姿がありました。それも昨年と同じ光景でありましたが、髪の伸びた彼女はとても綺麗に見えます。春花も以前は髪を伸ばしていましたが、今の彼女とは比べものにもなりません。
「なに？」その彼女が春花の方を向きました。耳にかかっていた髪がはらりと垂れて頬に掛かります。
「何でも無いわ、色羽ちゃん」彼女――色羽へ向けてそう答え、春花は前を向きました。ちゃん付けなどまるで子供の遣り取りだ、そう思っても、昔からの呼び方はそう変えられません。
「おかしな春花ちゃん」小声でくすくすと、色羽が笑います。鈴の転がるような、軽やかで澄んだ声でした。

教師がこれからの授業について説明を続け、プリントを配ります。前の席の女生徒が紙の束を春花に寄越しました。

「…………？」一瞬睨まれたような気がして春花は首を傾げつつプリントを受け取ります。女生徒は既に前を向いてしまっていました。

先程の色羽との遣り取りが五月蠅くて気に障ったのだろうかと春花は思いましたが、もうそれを確かめる事は出来ません。何も言われていない以上、謝るのも筋違いな気がします。

前の席の生徒は確か――和さんと云った筈。最初の学級会でそう自己紹介をしていた覚えがありました。

そっと首を伸ばして様子を窺ってみると、彼女は配られたプリントへ目を落としていました。わら半紙にガリ版で印刷されたそれには、選択授業について書かれています。書道と音楽と美術。その中からひとつを選ばなくてはなりません。

春花はまた右隣へ視線を向けました。色羽が真剣な表情でプリントを見詰めています。

彼女はどの授業を取るのだろうかと春花は考えます。何でもそつなくこなす彼女ですが、絵だけは少し苦手にしています。

字も綺麗だし、歌も上手い彼女ですが、絵画だけは唯一春花の方が得意だと言えましょう。

「春花ちゃんはどうするの？」こちらを向いた色羽が訊ねて来たので、「色羽ちゃんは？」と鸚鵡返しに訊きました。

「私？　……どうしようかな」どうやら色羽も、まだ決めかねているようでした。

クラスの級友も同様のようで、教室のあちらこちらからひそひそと声が聞こえてきます。

「ねえ、和さんはどうするんだい？」急に色羽が身を乗り出し、春花の前の席へ手を伸ばしました。

「え――ええっ!?」肩を叩かれた和が素っ頓狂な声を上げて振り返ります。教室中の注目が集まり、教師がわざとらしく咳をして皆をおとなしくさせました。

「ど……どう云う事ですか!?」振り返った和が小声で色羽に訊ねてきます。

「言葉通りの意味だよ。一緒に授業を受けた方が楽しいだろう？」

「そ、そんな事っ……」和は教壇の方が気になるのか、前へ向き直ります。

後ろの春花から表情をうかがい知る事はできませんが、耳朶が真っ赤に染まっているように見えました。

「……わ、私は、音楽以外なら……」か細い声で和は洩らしました。

「うん？　歌は苦手かい？」「……ええ」

目立ちたくないと云うのもあるのでしょう、春花から見た和は大人しそうな印象があります。

「それでは、美術にしようか。春花ちゃんもそれでいいかい？」春花は色羽からの問いかけにこくんと頷きました。元より春花には選択肢が無かったのですが――。

提出するプリントに名前を記入し、選択授業の欄に美術と書き込みます。

……もしかしたら、色羽は春花が得意な事を優先してくれたのかなと思いながら。

＊＊＊　色羽　＊＊＊

五月の飛び石連休を過ぎ、級友達とも打ち解けてきた頃です。

休み時間になり、色羽は教室の窓を開けました。柔らかく暖かな風が屋内へと流れ、色羽の長い髪を弄びます。

「――ねえ、春花ちゃん」いつも通りの呼び方で声を掛けて彼女の方へと振り向きました。進級したのだから、少しは大人っぽく出来ればいいのでしょうが、昔からの呼び方はそうそう変えられません。

「なあに？」隣に来た春花が顔を上げ、近くの和もこちらを向きます。

「課題のデッサンは仕上げてきた？」「うん、一応ね」春花は色羽の髪に手を伸ばしながら頷きました。

「そっくりに描くだけならそんなに時間かからないし」そう言いながら春花の指は色羽の髪を弄り続けます。放っておけば三つ編みにされてしまうかもしれません。

「和さんはどう?」こちらをそっと窺っている様子の和にも色羽は声を掛けました。
「わ、私は……」彼女はおずおずと画帳を持ち上げました。「まだ、下手……だけれど」
「心配要らないよ」色羽は微笑んで肩を竦めました。「だって私の方がどう考えても下手だからね」
「そ、そんな事っ……」頭を振る和に、色羽は自分の席まで戻って画帳を取り出して渡しました。
「見てご覧よ。課題だから描いてみたのだけれど、酷いものだろう?」
「昔に比べればよくなったと思うけれどね」相変わらず色羽の髪を弄りながら春花が言いました。緩く編まれたお下げが半分くらい出来ています。
「……まあ私の事はおいといて」色羽は和の方へ向き直りました。
「先週の授業で見せてもらったのだって、きちんとモチーフの特徴を捉えていたじゃないか。和さんは観察眼が鋭いのかもしれないね」
「……そ、そうかな……」照れているのでしょう、和は画帳に顔を隠してしまいました。
同じクラスになってから一ヶ月、和は随分と打ち解けて来たようでした。
「でも色羽さんの、とても丁寧に描かれているような気がします」色羽の画帳を見ながら和が感想を述べました。
「下手くそだからこそせめて丁寧に描かないと、成績で〝可〟すら貰えなくなってしまうからね」絵が下手で落第など、笑える話ではありません。

「これでも春花ちゃんに絵の描き方を教わって、随分とましになったんだよ」色羽がそう言うと、「春花さんが……?」と、和は懐疑の目を春花へ向けました。

「そんな大層な事は言ってないんだけどね」春花が完成した三つ編みの先を軽く持ち上げました。「どんなに拙くても、人に見せて感想を求めなさいってだけ」

「だけれど春花ちゃんのアドバイスがなかったら、私だって人に見せようとも思わなかったよ」

下手な絵を見せるのは恥ずかしい――だけれど、開き直ることが重要でした。

「わ……私も、頑張ってみます……」和はそう呟いて小さく頷きました。

予鈴が鳴り、さざ波のようだった教室内のざわめきが収まっていきます。

色羽も窓際から自分の席に戻ろうとして、三つ編みのほどけた自分の髪が乱れている事に気付きました。春花の悪戯はいつもの事ですから気にする事ではありません。

手ぐしで撫でつけていると、横からさっと櫛が差し出されました。

「……ど、どうぞ」和でした。

先生が来るまであまり時間がありません。色羽は受け取った櫛で手早く髪を梳かしました。

「ありがとう、和さん」櫛を返すと、和はそれを大事そうに受け取りました。何か大切な物なのかもしれません。抜けた髪が引っかかっていたかもしれませんし、綺麗にしてあげた方がよかったでしょうか。

そんな事を考えている間に先生が来てしまい、それはそのままになったのでした。

＊＊＊　色羽　＊＊＊

ある日のこと。

登校中に見慣れた髪型の女学生が前を歩いているのを見つけ、色羽は駆け寄りました。

「おはよう、和さん」「あ――おはよう、色羽さん」和は読んでいた本から顔を上げて会釈をします。「〝アクロイド殺害事件〟を読んでいるの？」

「ええ、薦められたから」和ははにかんで本を鞄にしまいます。

「私が読んだのは新潮文庫版の〝アクロイド殺人事件〟だったよ」色羽は言いながら首を捻り、「和さんのは創元社のだよね？　早川版は〝アクロイド殺し〟なんだけど、何が違うんだろう？」

「……訳した人が違うんじゃないかな」和が苦笑を浮かべ答えます。「内容までは変わらないだろうし」

「変わったら大変だよ。犯人がまさか――」「駄目っ！　まだ途中だから――」慌てた和が色羽の口を手で押さえてきます。口唇が掌に触れました。

「あっ――ご、ごめんなさい」

すぐに離れた和が申し訳なさそうに自分の口元を手で覆います。「いや、私が悪かったんだよ。ネタばらしなんてしちゃいけないね」

「……で、でも大丈夫。有名な作品だし、だいたいの処は識っているから」和は小さく舌を出しました。

「色羽ちゃん、和さんおはよっ」後ろから肩を叩かれ、色羽が振り向くと、そこには予想通り春花が笑みを浮かべて立っていました。駆けてきたのでしょう、少し頬が上気しています。

「おはよう、春花ちゃん」「おはようございます」色羽と比べて和は春花に対する挨拶が硬いように感じます。随分と打ち解けて来た筈なのにと色羽は思いますが、反りが合わないと云う事もあるのでしょうか。

皆が仲よく出来るのが一番だと色羽は思います。これまでだってそうして様々な事を乗り越えて来たのですから。

「あ、ちょっど拙（マズ）いかも」近付いてきた校舎を見て春花が色羽の袖を引いた。「生活指導の先生がいる」

「服装検査かしら」色羽は自分の身嗜みを確認します。

白い制服に、きちんと折り目の入ったスカート。紫色のリボンだってしっかりと身につけています。制服の中にまとっている肌着だって落ち着いた色のものですから、見咎められる事はないでしょう。

「大丈夫かなぁ……」春花が不安げに自らの靴下を指差します。学院指定の紺色の靴下。
「……何も問題ないと思うけど」和が首を傾げます。
「ほら、ここ」春花が指差したのはふくらはぎの外側——そこに小さく、赤いリボンの意匠がありました。
「……大丈夫じゃない？」和は気のない様子で洩らします。「指定の靴下じゃないけれど、軽く注意されるくらいよ」
「……去年あった服装検査で、赤い髪留めを使ってただけで反省文二枚書かされたのよ」春花は口を尖らせます。「すぐに書く事無くなっちゃって大変だったんだから」
「急いでいて気付かなかったと言えば大丈夫じゃないかな」色羽は思いついた事を言ってみました。間違えたのであればそう怒られないのではないかと考えたのです。
「それしかないよね」春花が頷きます。
入口で行われているのは持ち物検査のようで、他の生徒の様子を見るに、どうやら抜き打ちで行っているようでした。
「おはようございます、先生」担任教師の姿を見つけ、色羽は挨拶をして頭を下げました。
「おはよう、みなさん」担任は朗らかに挨拶をしてきます。足元に先生の荷物と思しき鞄が置かれていました。「急に校長先生から検査をするようにと言われたの」色羽の目線に気付いたのでしょう、担任は弁解するように言いました。

「ほら、他の先生も――」

担任の視線の先には生活指導の教師が他の生徒の鞄を調べていました。彼女の足元にも小ぶりなポシェットが置かれています。

「さあ、こちらも始めますよ」担任の声に色羽は振り返り、鞄の口を開きました。今日は何も余計な物を持って来ていない筈なので臆する事もありません。

「教科書、ノート――筆箱の中を見せて頂戴。……ええ、問題ありませんね」色羽の鞄の中の物をひとつずつ確認した担任が顔を上げ、和の方を向きました。

「……あの、今日は本を持って来ていて――」和は教師に見付かるよりも前に自ら文庫本を鞄から取り出しました。

「ええ、授業中でなければ構いませんよ」本の題名をちらりと見て教師は頷きます。〝殺害事件〟と云う物騒な言葉が目に入っても特に何も言わなかったのは、もしかしたら内容を知っているからでしょうか。

「先生、私は――」続いて春花が怖ず怖ずと教師へ向かって、鞄よりも先に自らの靴下を指差しました。

「あら……明日からは気をつけて下さいね」それでも担任教師は微笑んで窘めるだけでした。

色羽は生活指導の教師に挨拶をして、その傍の自らの下駄箱へ向かいました。上履きを取り出そうとして、靴の間に何かが挟まっている事に気付いたのです。

それは封筒でした。茶封筒ではなく、まるでエア・メールの様な白い封筒です。赤青の縁取りこそありませんでしたが——。

と、色羽は咄嗟に封筒を鞄の中へ押し込みました。近くに居た生活指導の教師に見られては、それは何かと詰問されてしまうでしょう。それは困ります。何せ色羽だって、それが何か判っていないのですから。

幸いにしてこちらに気付いた様子はありませんでした。色羽は上履きを突っ掛けて下駄箱の蓋を閉めました。

「どうかしましたか？」焦っているように見えたのでしょう、下駄箱が近くの和がこちらへ振り向きます。

「ううん、なんでもないの」まだ近くには教師がいます。この封筒が何であるかを確認する前に見付かりたくありません。

「行きましょう——春花ちゃんも」

こちらへやってくる春花を待ち、三人は教室へと向かったのでした。

＊＊＊　春花　＊＊＊

「——それで、これが入っていたの？」

休み時間の教室、春花は色羽の座席の前で白い封筒を眺めながら首を傾げました。

「ええ――中を見てごらんよ」色羽が促したので、封のされていないベロをめくり、中を覗き込みます。

和紙のような便箋が入っていました。折り畳まれている訳でもなく、封筒と同じ大きさの紙のようです。

「あれ?」取り出そうとして、春花は首を傾げました。

「何も書いてないように見えるけど?」「その通りだよ」色羽は小さく鼻を鳴らしました。

封筒から取り出してみると、成る程何も書かれていません。うっすらと五ミリほどの方眼が引かれているようです。

「で、これはなに?」便箋の裏も確認しながら春花は訊ねます。

「さあ?」色羽が肩を竦めました。封筒にも何も書かれていません――宛名すら。

「ひょっとしたら、私に宛てたものですらないのかもしれないね」「下駄箱を間違えた?」「かもしれない」春花の言葉に色羽が頷きます。

「そもそも、便箋だって手付かずなんだから」誰かに出す出さない以前の話でしょう。

何か手紙を書く必要があって準備したが、間違えて色羽の下駄箱に入れてしまい、それを持って来てしまった。と、春花は考えを披露しました。勿論根拠などありません。

「――だとしたら、元の持ち主が困っているかもしれないね」それでも色羽は頤に指を当てて零しました。

「もしくはもうひとつ」春花は指を一本立てて言いました。「なんだい？」
「この手紙が色羽ちゃん宛てに届けられたと考えた場合、この白紙の便箋にだって何か意味があるんだと思うの」
「意味？」よく判らなかったらしい色羽が聞き返してきます。
「例えば――そうね、恋文だったとか」
「これが？」納得出来ないのでしょう、色羽は白紙の便箋を見てうめきました。
「春花ちゃんはこれにどんな意味があると考えているんだい？」
問われて春花は口を噤みます。
何も考えていませんでした。
「……ええと、純白のキミが好きだよ、とか」
「よく解らない」にべもなく色羽は言うと、便箋と封筒を机へ並べました。
「そもそも、そんなに白くないよ」
便箋はやや黄みがかった色合いで、厚みもありました。便箋というよりも厚紙と云った方がいいかもしれません。表面は粗く、鉛筆で文字を書こうとすればぼろぼろと崩れてしまうように思えました。
「こんなのはどう？」春花はまだ別の可能性を思いつきました。
「なあに？」「この表面のざらざらが何かの暗号になってる……とか」喋りながら春花もそれはないと思いました。

もしも暗号だったとしても、受け取った色羽が解読出来なければ意味がありません。
春花は首を巡らし、教室の中を見渡しました。そろそろ次の授業が始まる時刻なので、級友は皆揃っています。
もしかしたらこの中に、この恋文――春花の中ではそう決まっていました――を出した人が居るかもしれません。
ふと、和と目が合いました。色羽の斜め前の座席に居る彼女は今朝の文庫本を開いたままこちらを見ています。春花達の会話が聞こえていたのでしょう。
ひょっとしてと、春花は和の席へ向き直りました。「あの手紙、和さんが出したの？」
「え――えええっ!?」普段の和からは想像のつかないほど素っ頓狂な声を出して彼女は飛び上がるように立ち上がります。
ばさり、と本が床に落ちました。
「ああ、いや、なんとなくなんだけどね」本を拾いながら春花は続けます。
「ほら、和さんの下駄箱って色羽ちゃんのすぐ近くだし――」
「だっ、だからってっ！」和は顔を真っ赤にして首を振りました。「な、なんで私が、色羽さんに、こっ――恋文なんかっ……！」
「そうだよ、春花ちゃん」成り行きを見守っていた色羽が口を挟みます。
「和さんは私の後に下駄箱へ来たんだから、手紙をいれるのは無理だよ。そうだよね？」
「え、えっ……ええ、そうね」顔を赤らめたまま和は何度も頷きました。

何か別の事に焦っているようにも春花には思えましたが、どうやら和が入れた訳ではないようです。

予鈴が鳴り、春花は自分の席に戻ります。

次の授業の教科書を机から出していると、前の席の和が振り返りました。「……私じゃないから」睨んでくるような眼差しにやや気圧されつつ、春花はこくこくと何度も頷いたのでした。

＊＊＊　和　＊＊＊

和は泣きそうになりながら机の上に顔を突っ伏しました。

後ろの席のクラスメイトはなんて事を言ってくれたのだ。まるで私が色羽に懸想しているような言い方で！

顔の熱がなかなか引きません。先生が来るまでに顔を上げなくては叱られてしまいます。

頬を抑えて顔を上げます。前の女生徒の背中が見えますが、当然ながら色羽達の居る後ろはもう振り向けません。

聞くとはなしに聞いていたふたりの会話を和は思い返しました。

恋文？

誰から？

本当にそんな事があったとしたら一大事です。必ず差出人を見つけ出さなくてはなりません。そうして何故そのような事を仕出かしたのか詰問せねばなりません。

だけれど色羽がすぐに否定してくれたのは、信じてくれたと嬉しかった反面少し複雑でした。

和が恋文を出す事など有り得ないと彼女は思っているのでしょう。想いを伝えるのは難しいのかもしれません。

教師が来て授業が始まっても、和はずっとその事について考えていたのでした。

昼休みになり、和は思い切って後ろを振り向きました。

和の動きに驚いた春花と隣の色羽がきょとんとした表情を浮かべます。

「どうしたの？」「……さっきの手紙、見せて下さい」和はそう色羽に告げました。

「もちろん構わないけど――」封筒ごと手渡され、和はそのまま春花の机の上に置きました。

「何か思いついたの？」弁当箱を広げようとしていた春花が手を止めたまま首を傾げます。

「黙ってて」にべもなく和は云うと、封筒から取り出した紙を眺めます。

「便箋には見えないよね」色羽が身を乗り出してきます。

随分と繊維の荒い和紙でした。紙の端を軽く引っ掻くと、ぼろぼろと崩れてしまいます。

「こんな紙、売っているの見た事あります?」和は顔を上げてふたりに問いかけました。

「お菓子の包装紙みたいね。……でもそれだったらマス目は入ってないか」春花は言います。「新宿の世界堂でも売っていないだろうね」色羽は腕を組んで唸ります。

「……自分で漉いたのかな?」確かに紙としては非実用的で、売られていたとしても買うことはないでしょう。何に使えばいいのか判りません。

この紙の硬さは、一度水に浸かったもののように思えます。習字の半紙が墨をすって固くなった状態に似ていました。

「それも何かのメッセージなの?」春花は先程から首を傾げっぱなしです。

「これから何か読み取れるのならそうなのかもしれないけど」和は素っ気なく呟き、便箋——すでにこう呼ぶ事に対して和感がありますが、他に呼び様がありません——を置きました。

「もしかしたら、封筒の方に秘密があるのかもしれないね」色羽の呟き。

和は頷いて封筒を手に取りました。彼女の言う事に一理あると思ったのです。決して春花の言う事には耳を貸さないと云う訳ではありません。

見るからに普通の封筒——一般によく流通している茶封筒ではないものの——でした。

「和封筒と洋封筒と言うんだったかしら」言うまでも無く、この白い封筒は横書き用の洋封筒です。蛍光灯の光に透かしてみても何もありません。

「——宛名が書かれたような跡もないね」和の頬に顔を寄せるようにして色羽が封筒を覗き込んで来ました。

石鹸の香りでしょうか、甘いふわっとした匂いが和の鼻腔を擽ります。

「——そっ、そうね」彼女の長い黒髪を手で梳きたいと思う誘惑に打ち勝って、和は封筒も机へ置きました。色羽がやや離れて再度封筒を眺めます。

「——うん、この封筒は市販品だね。調べれば何処で売られていたかも判るんじゃないかな」調べる方法は思いつかないけど——と色羽は続けました。

調べる方法——伝手ならば和は思いついた事がありました。

「一軒一軒文具屋さんを廻ってみるとか」春花の言う事は無茶が過ぎていると和は思いましたが、ひと睨みするだけに留めました。やり過ぎて色羽に見咎められては堪りません。

「……この封筒、一日だけ貸してもらっても構いませんか？」意を決して和は色羽に訊ねた。

「構わないよ。と云うか、私の物だとも思えないけれどね」勝手に下駄箱に入っていたものだと云う認識なのでしょう。

「何をするの？」春花が訊いてきます。

「もしかしたら調べられるかもしれない」そう和は言い、便箋を封筒へ戻しました。「そう云う人が、身近に居るから」

「え――ひょっとして、探偵？」春花が反応し、身を乗り出すようにして訊ねてきます。

「……そんなんじゃないから」興味を持たれることも厭でしたが、身内がそんな瘋癲であると知られる事も厭でした。

「なんだ、違うのか」そんな残念そうな声は、春花ではなく色羽から発せられました。

「まだ探偵さんを探してるんだ、色羽ちゃん」

春花の言葉に和は首を傾げました。ですが一度は否定した手前、今更そうだとはとても言えません。

「指紋とか調べれば、出した人が判るかもしれないね」春花はそう言いますが、和よりも先に色羽が首を振りました。

「私達がずっと触っているのだから無理だよ」未知の指紋が見付かったとしても、それが誰のものなのかまでは判らないでしょう。

「――そもそも、目的は何なのだろう」色羽がぽつりと呟きました。

「だから恋文だって」茶化す春花をひと睨みして黙らせると、和は考え込みます。当然ながら恋文だと云う妄言は最初から排除して。

「……有り得ない事だけれど、誰かから嫌がらせを受けているとか」色羽にそんな事をする人が居るなんて和にはとても考えられません。

もしもそんな人が居るのならば決して赦されません。もしかすると容姿端麗で完璧な色羽に対して嫉妬心を持つ者が居るかもしれません。

「どうして有り得ないと言えるのかはちょっと解らないけど」色羽は苦笑を洩らします。和の考えている事が解らないからでしょう。解られても和が困ります。

「まあ、嫌がらせとしか思えないよね、何も書いてないんだし」春花が口に出し、また首を傾げ、「……ひょっとして、そもそも色羽ちゃん宛ではないとか」

「そうなると、本当にもうお手上げだね」色羽は言葉通り両手を上へと伸ばしたのでした。

放課後、和は列車に乗って移動していました。建設途中の超高層ビルを眺め、さらに東へと向かいます。

一度車両を乗り換えて到着した駅は人が多くごった返していました。その人混みの中を慣れた様子で和は進みます。

こちらへ来るのは久し振りの事でした。駅前にあるビルディングの一室。和が生まれる前からここに居を構えています。

軽くノックをして入口のドアを開け、中を覗き込みます。いつも通り来客は居ません。客商売なのにこれで成り立っているのが不思議です。

「いる？」和は中へ向かって声を掛けました。

返事はありません。留守なのに施錠もしていないとは考えにくいのでそのまま室内へ入ります。

応接用のソファセットに彼は横たわっていました。入口からは丁度背もたれの陰になって見えない処です。頭から新聞紙を被り――恐らく寝転がって読んでいるうちに眠ってしまったのでしょう――小さくいびきを掻いています。新聞紙の端が小刻みに揺れていました。

和は溜息を吐き、通学鞄を下ろしました。暫くその場で咳払いなどをしてみたりして待ちますが、一向に気付く様子はありません。もう一度溜息。

すぐ近くに立ち、狙いを定めます。「よっ――」そのまま新聞紙の上にお尻から飛び込みました。

「ぶはっ!?」流石に目が醒めたのか、彼は飛び上がるようにして起き上がりました。

「なっ……なんだ、お前か……」和を見て彼は落ち着きを取り戻します。

「おはよう、父さん。……暇？」言わずもがなの事を彼――父に尋ねました。

「ちょっと忙しかったんでな、小休止してたんだよ」父はそう言って伸び放題の髪を掻きます。

「一旦帰ろうかと思ってたんだが」と、父が和へ目を向けました。「……なんでお前がこっちに来たんだ？」

「用事があったから」和は鞄から例の封筒を取り出して父に渡しました。

「友達が受け取ったんだけど、何も書かれていないの」
「ふむ――」父は封筒の表裏を眺めます。
「宛名すら書かれていないんだったら、本当にその友達が受け取るべきだったものかも判らないいんじゃないのか？」「でも、その子の下駄箱に入っていたの」
「下駄箱ねえ――」父は気乗りしない様子で便箋を取り出しました。
「偶々そこに置いたってだけじゃないのか？」「下駄箱には蓋も付いているのに？」父の言う事に和はすぐさま反論します。そのくらいの事は既に考えた事だからです。
「その子の下駄箱ってのは胸の高さくらいで、一番外側だったりするんじゃないのか？そうだとしたら咄嗟に隠す事だってあるだろうさ」
和は父の言葉に何も言えません。確かに色羽の下駄箱の位置は父が言った通りの場所だからです。
「その子は別に不良って訳じゃないんだろ？」父は固い便箋を眺めながら訊ねてきます。
「も――勿論よ。優しいし、頼れるし、スタイルだっていいし、私とよく話してくれるし――本の趣味だって同じなんだから」色羽のよい処を挙げていると、父がなんとも言えない奇妙な表情を浮かべているのに気付きました。
「――何？」「……いや、何でもないけどな」父は便箋を持ったまま部屋の奥にある執務机に歩いて行きます。

和は先程まで父が寝ていたソファに腰を下ろしてくしゃくしゃになった新聞を畳みます。新宿の街角に屯（たむろ）するヒッピーの記事が目に入りました。

父は机の傍に積まれてあった紙の束から潰れた箱を引っ張り出しました。和にも見覚えがあるそれは、父の友人と云う人が持って来たお土産が入っていたものでした。確か京都の味噌の詰め合わせ――。

「その子が真面目な生徒だってんなら」父は引き出しから鋏を取り出します。「こんな物を持ってる道理がないんだよ」

「どう云う事？」和が見ると、父は便箋を箱に宛がっていました。色や紙の荒さもよく似ているような気がします。

「……まさか、その箱が便箋の正体？」

「いやいや。これはただの包装紙だよ。……流石に文字が入る処は駄目だろうな」父は便箋の大きさを測っています。

「便箋は水が浸透しやすいように荒く、厚めに作られているようだな。この箱の包装も濡らした方がいいかもしれんが――」そう呟きながら父は箱を切っていきます。

「……入れ替えるつもり？」和は父の意図に気づきました。

「この便箋は調べる必要があるからな。代わりになるものを入れておけばいいさ」

「すぐに気付くわ」「正直に言えばいいだろ」切った紙を見比べながら父は言います。

「本来の持ち主以外に文句を言う奴はいないさ」

「……と云う事は、それそのものに秘密があるのね？」和は父の持つ便箋を指差しました。父は肩を竦め、いそいそと便箋を別の袋へ仕舞います。

相当宜しくない物なのでしょう。父の仕草からそう感じた和は大人しく引き下がることにしました。

その代わり、「――持ち主は判る？」父が切り揃えた紙を入れた封筒を受け取り、和は訊ねました。

「判る訳ないだろ？」父は肩を竦めます。

「オレに言えるのは、余計な事に首を突っ込むなって事だよ」そう言って和の頭をぽんぽんと叩くように撫でてきます。

「余計な事じゃないわ」大切な友達が関わっているのです、和も本気を出さなければなりません。

「……まったくお前ときたら、誰に似たんだか」父が溜息を吐きました。

「そんなの決まってるじゃない、母さんよ」和はそう言って胸を張ったのでした。

＊＊＊　春花　＊＊＊

「――それで、中身は別のになったんだ」

色羽の机の上に置かれた封筒を眺め、春花はそれを持って来た和に訊ねました。

「なんで？」
「……調べるとは言っていたけど」和が答えますがどこか上の空です。色々と考えているのでしょう。
「結局、これをどうすればいいんだい？」色羽が封筒を手に取ります。
「……これが誰の物かはまだ判っていないわ」和はそう呟きます。「私達がこうして教室で話していても、クラスの誰も反応しないと云う事は、別の教室に居るのかも」
春花は顔を上げ、教室内を見回します。
クラスメイトは皆大人しく、こちらに対して興味も向けてきていません。各々が本を読んでいたり、次の授業の予習などをしているようです。
確かに、この中に手紙を出すような人が居るようにも思えません。
いや――和の言う通りならば、色羽に向けて送られた手紙ではないのですから、尚更意図が掴めません。
「間違って私の下駄箱に入れた事も考えられるんだよね」色羽は首を傾げます。
「勝手に中身を入れ替えてもよかったのかな？」
「色羽さんが気に病むことじゃないわ」和がそう告げ、色羽の手を握ります。慰めようとしているのでしょうか。色羽が特に傷付いているようには見えませんが。
「便箋に問題があったんだよね？」春花が訊ねると、和がこちらとちらりと見て首肯しました。色羽の手は握ったままです。

「うーん……」色羽になつく和についてなのか、便箋の正体になのか——春花はうめいて考え込みます。

「じゃあやっぱり、私宛と云う訳じゃなかったんだね」色羽がうんうんと頷きました。

「——あの時、入口では持ち物検査をしていました」和が顔を上げ、色羽を見詰めます。

「先生に見咎められる前に、咄嗟に隠したのではないでしょうか」

「……下駄箱が近いと云う事は、去年のクラスの人かな」

確かに今の下駄箱の配置は去年のままになっています。春花をはじめ、この教室にも多く残っていますが——。

「呼びかけてみようか」色羽の提案に春花は顔を戻しました。「え、でもよくないものを隠したのだとしたら危ないんじゃ——」

「ただの落とし物を預かっているだけなら問題ないさ」色羽はそう言うと、封筒を春花の方へ寄越してきたのです。

「え？」「こう云う呼びかけは、春花ちゃんの方が得意でしょう？」にこにこと色羽が言いました。まあ得意と云うか、不得手ではありません。

余り他の人と話さない和はともかく、色羽ならば問題なくクラスメイトに呼びかける事ができるでしょう。多少芝居がかって見えるかもしれませんが。

「まあいいけど」春花は頷いて封筒を受け取りました。これが単なる落とし物と云う体で声を掛けなくてはなりません。

まずはこの教室に居る人たちに確認し、その後他の教室でも――。

と、予鈴が鳴り、それを見計らっていたかのように次の授業の担任教師が教室へ入ってきました。

「席について下さい」そう促され、春花は封筒を持ったまま自分の座席へ戻らざるを得ませんでした。

授業が終わり、春花は教師と入れ替わるようにして教壇へ立ちました。授業直後の為流石にこの行動は目立ったようで、教室中の視線を集めます。「えっと――」一度呼吸を整えて、ついでに頭の中で話す内容も整えて――。

「――先日の登校時、何も書かれていない便箋と封筒を拾いました。持ち主の方がいらっしゃれば、私か色羽ちゃ――さんの方へお知らせ下さい」

そう教室の全員へ告げて、ぺこりと頭を下げました。役目は終わったとばかりに顔を上げ――目の前に担任教師の顔がある事に気付きました。

「どうかなさいましたか？」先生は柔和な表情を崩さずに問いかけてきます。

「ええと――」咄嗟に言い訳を考えますが、別に悪いことをしていた訳ではありません。春花は素直に状況を担任教師に説明しました。

「――なるほど、そうでしたか。誰か落とした方はいらっしゃらないのですか？」教師が教室内に声を掛けるも、誰も反応を見せません。

「……どうやら、いらっしゃらないようですねえ」のんびりとした口調で担任は呟くと、そっと春花へ向けて手を差し出しました。「それでは、私が預かっておきましょう」担任の言う事は妥当だったので、春花は素直に封筒を手渡しました。

「……うん？」

春花がそう首を傾げたのは、帰りの会（ショートホームルーム）が終わって暫くしてからでした。

＊＊＊　色羽　＊＊＊

「――昭和二十六年に施行された住民登録法は、もうすぐ住民基本台帳法に変わる予定です。この目的は――」

翌日もいつもと同じように授業は続きます。色羽は教師の説明をノートに書き留めながら、時折窓の外を眺めていました。

あの手紙は結局担任教師が持っていってしまいました。それはそれで構いません。落とし物として説明した以上、先生にはそうする権利と義務がありました。

春花は謝ってくれましたが、そもそも謝られる筋合いも無い事です。気になる事は多々残っていますが、全て終わった事だと片付けてしまってもいいでしょう。

斜め前の座席に居る和へ目を向けます。彼女は色々と調べてくれました。しかしどうやって調べたのかは詳しく教えてくれませんでした。

色羽は昔から探偵に憧れを抱いていました。それは幼い頃、事件に巻き込まれた事が切っ掛けかもしれません。昏い穴蔵の中で過ごした数日。そこから助け出してくれたのが探偵の人でした――そう聞いています。

正直、よく覚えていないのです。空腹と極限の緊張状態にあった事が、当時の辛い記憶を封じ込めているのだろうと病院の先生は言いました。確かに思い出したくないことが多々あったと色羽は思います。

それでも――。

色羽はちらりと隣の席を見ました。春花の横顔。彼女も同じ恐怖を乗り越えて来たのです。ふたりはそれ以来の親友でした。

春花が色羽の視線に気づきます。僅かに首を傾げた後、微笑んでこちらに小さく手を振りました。色羽も手を振り返してから授業に集中します。

「――戸籍法の改正は昭和二十三年でした。これにより、旧来の家制度による管理は終わりを告げました――」

授業が終わり、昼食の時間になりました。春花が机を色羽の方へ寄せてきます。和は椅子だけを移動させて色羽の向かいに座りました。それがいつもの昼食風景です。銘々が弁当を持ち寄り、おかずの交換などをするのもいつも通りです。

色羽は和と交換した豆腐の味噌田楽を味わいます。「……食べた事のない味の味噌ね」

「……親の知り合いの人が持ってくるの」恥ずかしそうに和が俯きます。
「あ、うちもよく近所の人からお裾分け貰うよ、大根とか」春花がその大根を和の弁当箱の蓋に載せました。「……ありがとう」和が頷きます。
色羽も春花も、家は農業をしていました――都下の開発の為、数年前に畑を売って離農してしまいましたが。今は小さい畑で家族が食べる分だけを作っています。
そのうちの一品――アスパラガスの煮浸しを摘まみます。程よく歯ごたえがあり、味も染みています。
「そういえばさ、色羽ちゃん」蕗の煮物を色羽の弁当箱に移しながら春花が口を開きます。
「前にビートルズのアルバム聴きたいって言ってたよね。親戚の人がうちに持って来てくれたから一緒に聴かない？」
「えっ――いいの？」「もちろん」春花が笑います。彼女の家は少々複雑で、今は祖母とふたり暮らしをしているのです。
「わっ――わ、私も、いい……？」怖ず怖ずと和が訊ねてきます。「うん、もちろん」春花が頷きます。
「和さんもビートルズ好きなのかい？」色羽が訊ねると、和は慌てたように顔を上げ、
「あ――あまり、知らないけどっ、聴いてみたくて……その、駄目……ですか……？」
「駄目な筈ないじゃないか」恐る恐る上目遣いで訊ねてくる和に、色羽はそう答えます。

「同志が増えるのはいい事だよ」「あ……ありがとう」ますます和が縮こまります。

「和さんはレコード持ってるの？」色羽の弁当箱から卵焼きを摘まむ春花が話を振ります。「母さんが使――好きだから、家にはクラシックとか、ミュージカルとか」

「へえ、いいなあそう云うのも」和の母親は音楽家か何かなのだろうかと思いながら色羽はうんうんと頷きました。家にあるのはAMラジオだけで、レコードプレイヤーはありません。白黒テレビはあるのですが――。

「――色羽さん」不意に背後から呼びかけられて色羽が振り向くと、そこには表情を曇らせた担任教師が佇んでいました。「あ、先生――」

「放課後になったら、職員室へ来て下さい」それだけを告げ、教師は足早に教室を後にしたのでした。

「……やっぱりあれかな？」放課後になり、廊下を進む色羽の横から春花が小声で囁いてきます。「……だろうね」言わずとも知れた事です。

「大丈夫……？」和が心配そうに訊ねてくるのを、色羽は笑みを向けて返します。

「心配要らないよ。私は何も悪い事をしていないのだからね」

「そうですけど……」和はまだ不安のようでした。

「持ち主が見付かった――とはいかないだろうけれど、何処で拾ったかとか訊かれるんじゃないかな」

あの手紙の件で、教師が色羽を必要とするのはこのくらいだろうと見当を付けながら話します。

「それに、全く関係の無い事で呼ばれたのかもしれないしね。成績とか」色羽は舌を出して笑いました。

「じゃあ行ってくる。あ、先に帰ってて構わないからね」そうふたりに告げ、色羽は職員室へと向かったのでした。

＊＊＊　和　＊＊＊

「……どう思う？」色羽の背中を見送っていると、春花が声を掛けてきました。

「……別に何も」素っ気なく和は答えます。

和は春花の事を苦手にしていました。こちらが構わないで欲しいと云う空気を発しているのにもかかわらず、ずけずけと踏み込んでくるからです。

「色羽ちゃんが叱られたりする事はないと思うけど」「――そうですね」和は短く返答しました。彼女が怒られる事はないでしょう。色羽は学業も優秀で、素行だって申し分ないのですから。

「――本当に、あの手紙とは関係ないのかもしれません」和はちらりと春花を見ます。

「どうして？」「手紙について皆に話したのは貴女ですから」

それなのに何故色羽が呼ばれたのか——。

「……うーん」春花が何やら考えているようですが、和はそれを無視して踵を返しました。「あれ、帰るの？」顔を上げた春花が訊ねてきます。

「……校舎の入口に行くだけ」色羽を残して帰宅するなど有り得ません。

「下駄箱を調べに行くの？　色羽ちゃんのトコに入れた人の手懸かりがあるかもしれないし」思ってもみなかった事を春花は言いました。「そう云うのってなんだか、探偵みたいだよね」

「やめてよ」本当に厭だったので、そう云う顰め面を春花に向けたのでした。

入口に着くと、春花は案の定色羽の下駄箱を開けて覗き込んでいました。

「ここからだから……」なにやらぶつぶつと呟きながらその周囲の下駄箱も覗いています。「……何をしてるのよ」中の靴までひっくり返しそうな様子に堪らず和は声を掛けました。

「んー、別のクラスの子がどのくらいこのへん使ってるか調べてるの」

「別の……？」和は首を傾げます。確かに昨年度から下駄箱の位置は変わっていない為、クラス替えのあった今年は複数のクラスが入り乱れているような状態です。

「手紙を入れたのはウチのクラスの人じゃないからね」事も無げに春花は言いました。

「……どうして判るのよ」和は靴を出そうとしてた手を止めます。

「教壇で手紙について話した時、みんな不思議そうにこっちを見てるだけだったから。誰も何も知らないみたい」

「……そんなの、あの一瞬で確認したの？」和は頭を振りながら訊ねました。見ていた分には、彼女はさっと首を巡らした程度の動きしかしていなかった筈です。

「あからさまに目を逸らしたり、おかしな動きをする子が居ればすぐに気付くもの」彼女はそう言いますが、和はいまいち信用出来ません。「……じゃあ、私の前の人はどうだった？」

「高木さん？　……んーっと」春花は目を瞑って当時の事を思い出そうとしているようでした。「……右肘ついてこっちを見てたかな。私が言った事に対してはちょっと首を傾げてた」

「……そう」和にそれを確認する術はありませんが、一応納得する事にしました。そうでもなければ話が進みません。

「それで、下駄箱が近い他のクラスの子かな、って」そう言って春花はまだ隣の下駄箱を覗き込みます。

「――先生は？」「え？」和がふと言った言葉に春花が目を瞬かせます。

「だから、先生。あの日入口に居たし、先に手紙を入れる事は出来たんじゃない？」

それに、手紙も回収していったし――

「あ……うーん……見てなかった」春花は申し訳ないとばかりに頭を掻きました。

「顔を上げた途端目の前に居たんだもん、びっくりしたよ」

担任教師があの手紙を置いたと仮定した場合、自分で回収したのですから中の紙が違っている事に気付く筈です。それが何を意味するのかはまだ解りませんが――。

「あれ……？」和が考え込んでいる横で、春花が外を見て声を出しました。「誰だろ？」

顔を上げた和が見たのは、校舎の前庭を此方に向かって歩いてくる男性の姿でした。

櫻羽女学院は基本的に男性教師が居ません。昔あった事件の影響だと誰かが言っていましたが、和は然程興味が無かった為詳しくは聞きませんでした。

だから敷地内に男性が居る事がとても珍しいのです。しかも作業着などではなく、きっちりと背広を着こなした人などは――。

その人が入ってきて、思わず和は顔をしかめました。

見知った人――正確には父の知り合いだったからです。

「おや――」彼が和の姿を認めて眼鏡を指で押し上げました。「君が通っているのですか、成る程――道理で」

「……何をしに来たんですか」和は低い声で男に問いかけました。

「警察の人間が来ている以上、事件があったに決まっているでしょう？」男は和の刺すような視線を気にする素振りすら見せずに答えます。

「警察の人？」ふたりの遣り取りを隣で窺っていた春花が声を上げます。「と言うか、和さん知り合いなの？」

「……甚だ不本意ですが」和はこの男が嫌いでした。「警察の人間がいるだけで事件が起こっているのでしたら、犯人は間違いなくその警官でしょうね」

「僕は取り締まる側ですよ」男は肩を竦めます。子供の言う事など気にも留めていないと云った雰囲気です。

「ええっと……何があったんですか？」春花が男に尋ねます。和が話を進めない事を察したのでしょう。

「先ずは職員室へ――いや、話を聞く方が先か」男は和へと目を向けてきます。爬虫類のような――とは言い過ぎかもしれませんが、まるで犯人に自供を迫る刑事の目です。

「あの紙片を見つけたのは君だな？」単刀直入に男は訊ねてきました。

「父からあれを受け取ったのでしたら気付くでしょうに」答えながら、和は頭の中で思案を巡らせます。

父が回収した便箋がこの男の手に渡ったのは、あれが何らかの問題を孕む物だったからでしょう。あの時の父の言動も、便箋を不審物だと考えているようでした。

調べた結果が、此処へ捜査員を派遣すると云う事なのでしょう。ただし彼は単なる窓際部署の人ですから、警察も本腰を入れていないのは明らかです。

「……暇なんですね」和は辛辣な態度を崩しません。普通の家庭ならば親に叱られるのでしょうが、和の父が『もっと言ってやってくれ』と煽るので仕方ありません。母は苦笑いを浮かべていましたが。

「あの便箋は何だったのですか？」和は訊ねます。

「本来ならば君たちのような一般人に伝えるようなものではないのですが――まあいいでしょう」厭に勿体振った言い方をして、男は髪をかき上げて気障ったらしい口調で続けます。「あの紙片には――」

＊＊＊　色羽　＊＊＊

「――失礼します」色羽は職員室――ではなく、生徒指導室と掲げられた部屋の戸を叩いていました。中から返事は無いものの、それは最初から解っていた事です。そっと戸を開け、中に入ります。

物々しい部屋の名称とは裏腹に、そこは単なる特別教室隣にある準備室でした。教材が端に並び、戸棚の中にも本が並べられています。窓の外からは暖かな午後の陽射しが射し込んでいました。

色羽は近くにあった椅子を引き、腰を下ろします。担任教師からは此処で待つようにと職員室で告げられました。何故呼び出されたのか、理由はまだ聞いていません。

色羽は座ったまま室内を見回しました。二階の隅にあるこの部屋は、かつては歴史科の準備室として使われていたそうです。壁には世界地図が貼られており、隅には埃の被った地球儀も置かれていました。

教師が指導室に入って来ました。色羽は立ち上がり、頭を下げます。

「お座りなさい」教師はすぐにそう告げてきました。色羽はそれに従って腰を下ろします。

「あの——先生、私は何故呼ばれたのでしょうか」先ず色羽はそう切り出しました。十中八九あの手紙の事だろうと予想は付いているものの、彼女が来た理由が解らなかったのです。

「あの手紙を見つけたのは貴女で間違いありませんね?」近くの机の端に手をつき、教師が訊ねてきます。

「……はい、私の下駄箱に入っていました。クラスの人に訊ねても、誰も知らなかったので——」色羽の説明を遮るように、教師が一歩前に出てきました。

「——そんな事はどうでもいいの。中の紙はどうしたのですか?」

睨み付けるような目に、色羽は思わず椅子の上で身体を反らしました。

この先生が持ち主だ——。

便箋が換わっている事は色羽たちと本来の持ち主以外知らない事なのですから。

しかし、先生が持ち主であったにせよ、このように血走った目を向けられるいわれはありません。勿論便箋が別のものに換わっていた事について怒っているのであれば仕方の無い事なのですが。

「落ち着いてください、先生。便箋を入れ替えた事は謝りますから——」

「あれは何処ですか!?」色羽の言葉を遮って先生は絶叫に近い金切り声を上げて掴み掛かって来ました。

椅子が倒れ、色羽の身体が床に投げだされます。

「っ――せ、先生っ……！」背中を打って息が詰まる中、色羽は教師の手から逃れようと身体を捩らせます。

教室の扉が見えました。そちらに手を伸ばそうとした時、急にその扉が音を立てて開きました。

「色羽ちゃんっ!?」飛び込んできたのは春花の声と――それを押しのけて色羽に抱きついてきた和でした。

「大丈夫、色羽さんっ!?」頷く色羽の身体をなで回すようにして、和は怪我が無いかを確認してきます。

「え、ええ……ありがとう」手を借りて立ち上がった色羽の前に、見慣れぬ男性が立っていました。何処かで見たような覚えはあるのですが――。

「さて――どうやら間違い無いようですね」男性が眼鏡の奥の目を歪めて嗤います。先生は血走った目を向け、部屋の隅で固まっていました。

「大丈夫ですか？」後ろから心配そうな声を掛けられ、色羽は振り返り、ほっと息を吐きました。「申し訳ありません、こんな事になるなんて……」そう言って、担任教師は頭を下げました。

「……私も思いませんでした」色羽はそう呟くと、男性と対峙している生活指導の教師へ目を向けました。

「――今年から麻薬取締法で取り締まりの対象になっているんですよ、これは」男性が透明なビニルに入った例の便箋を教師の前に掲げました。

「貴女もそれが判っていたから、咄嗟に生徒の下駄箱へ隠したのでしょう？」

男性の指摘に生活指導教師は押し黙ります。「そちらの先生が仰有っていましたよ、登校してすぐに所持品検査をするよう言われたので荷物もそのままだった、と。ここでは教師も検査を受けるそうですね」それは色羽には初耳でした。

「……先生同士で確認し合うそうです」傍に居る和が耳打ちします。

「素人が見た処で正体は解らないでしょうから、そのままにしておけばよかったんですよ」男性が冷笑じみた表情を教師へ向けました。

「……結局あれはなんなのだい？」色羽は小声で和に訊ねました。

「麻薬――というか、幻覚剤だそうです。紙に染みこませて、それを舌に乗せるとか」

確かに、それは見付かっては困る物でしょう。どうして教職にある者がそう云った物を所持していたのかは解りませんが。

「――さて、僕も暇ではないのでね。すぐにこれの入手先を吐いて貰いますよ。……まあどうせ、新宿か池袋あたりのヒッピーでしょうがね」

男性が生活指導教師の腕を掴んで拘束しました。

彼女は抵抗するつもりも無いのか、そのまま引っ張られていきます。すれ違う際、色羽は男性と一瞬だけ目が合いました。「……ふむ」何やらひとり頷き、生活指導の教師を連れて部屋を出て行きました。

「……結局なんだったの？」入口の扉の所に居た春花の言葉に色羽は我に返りました。

「生活指導の先生が、覚醒剤？　みたいなのを隠し持っていたから、警察の人が捕まえに来たってだけ？」

「概ねそう云う認識でいいと思う」春花に続けて和が頷きました。

「――貴女たち、早くお帰りなさい」部屋に残っていた担任教師が三人を促します。「それと――此処で起こった事はくれぐれも内密にお願いしますね」

「ええ、わかりました」元より言いふらすつもりも無い色羽は頷きますが、隣の和は不満げな表情を浮かべました。「まさか、隠蔽するつもりはないですよね？」

「それこそ、まさかですよ」担任教師は少し寂しげに微笑みました。

「昔この学院で大きな事件がありました。その際も当時の教頭先生の指示で包み隠さず公開されたそうですよ」

「それは聞いたことある」春花が頷きました。「私が生まれる前の事らしいけど、うちのお婆ちゃんが話してたよ」

「どちらにせよ、皆さんへの説明は後日と云う事になるでしょう――私もよく解っていませんから」

そう担任教師は告げ、三人の背中を押したのでした。

＊＊＊　春花　＊＊＊

数日が経過しました。学院はいつも通りの姿を取り戻していました。もっとも、教師が逮捕されたと云う説明を受けても、大多数の生徒にとっては然程の関心事ではなかったと云うだけでした。

「……やっぱり見覚えがあるんだよね」春花は腕を組んだままそう呟きました。「こないだのおまわりさん、色羽ちゃんは知らない？」

隣の席の色羽は教科書を揃えていた手を止め、暫し考え込みます。「……確かにそうなんだよね。あの時に居たのかもしれない」

「色羽ちゃんは探偵さんしか覚えてないんじゃない？」からかうように春花は言いました。

「……そんな事ないけど」色羽が顔を逸らします。耳朶が赤くなっているような気がしました。

「ねえ和さん」春花は前の席に座る和の背中を軽くつつきました。「……なによ」不機嫌そうに睨んでくる和に春花は訊ねます。「もしかしてさ、あのおまわりさんって和さんのお父さん？」

「……はあっ!?」素っ頓狂な大声が教室内に響きました。授業中では無かったのが幸いでしたが、流石に無関心を装う他のクラスメイトも、何事かと視線を向けてきます。

「ほら、例の紙を調べて貰ったんでしょ？　だからそうなのかな、って」

「や……やめてよ、おぞましい」幾分か声を潜め、和は吐き捨てるように言いました。

「……あの人は単なる父親の知り合いと云うだけだから」

「じゃあさ、お父さんも警察官だとか？」「……昔はそうだったらしいけど、よく知らない」和は俯いて首を振りました。

「へえ、そうなんだ」色羽も会話に参加してきます。「和さんのお父さんだったら、凄く仕事が出来そう」

「……全然そんな事無いから」和は謙遜しているのでしょう、そう呟いて顔を背けました。両親が居ない春花にはよく解らない感覚です。

「だけれど、あの手紙の正体をひと目で見抜いたのだろう？　何の仕事をしているか識らないけれど、その洞察力は目を見張るものがあるんじゃないかな」

「……あ、ありがと……」和の声はほとんど聞き取れませんでした。

予鈴が鳴り、次の授業の先生が教室へ入ってきました。色羽も和もすぐに前を向き、授業を受ける準備を整えます。春花は机から教科書とノートを取り出して並べました。

社会科の授業が始まりました。前回の続き——近代の戸籍制度についてです。

板書をノートに書き写しながら、春花は自分の家の事を考えていました。

祖母とのふたり暮らしですが、農家をしていた家は大きく、いくつも部屋があります。屋根裏部屋には寝台もあり、明らかに誰か他の人が居た形跡が残っていました。

祖母に尋ねても、何も教えてはくれませんでした。

いつもそうなのです。春花が知らぬ両親の事を訊いても教えてくれません。居る事は確かなのに――。

「――戸籍は誰でも自由に閲覧する事が出来ますが、役所に届け出て手数料を支払う必要があります――」教師の説明が続きます。

――戸籍を見ればいろいろと判るのではないでしょうか。そう春花は考えました。役場の場所は判っていますし、手続きの方法だって今知る事が出来ました。

ちらりと隣の色羽へ目を向けます。少し離れていますが、彼女も同じ街に住んでいますから、頼めばふたりで一緒に役場へ行く事も出来るでしょう。

ノートの一番後ろの頁に定規を宛がい、静かに破ります。出来た便箋に鉛筆を走らせると、小さく折り畳みます。教師の目が此方を向いていないことを確認しつつ、ひょいと色羽の方へ放り投げました。

気付いた色羽が顔を上げてこちらを向きます。春花は手で手紙を開く仕草をして読むよう促しました。

色羽が手紙に視線を落とします。そう長々とは書いていないのですぐに読み終わるでしょう。顔を上げてこちらを見た色羽が指で小さく輪を作り――。

「――それでは、皆さんも役場へ行って戸籍謄本を貰ってきましょう。これは来週までの課題とします」
そう教師の声が教室内に響き、春花と色羽は暫し顔を見合わせて笑ったのでした。

＊＊＊　和　＊＊＊

土曜日の放課後、和は色羽達と駅で別れました。
彼女達はこれから役場へ行って戸籍謄本を取得してくるそうです。和は後ろ髪を引かれる思いがしましたが、どうする事も出来ません。
戸籍謄本とは、自分の本籍地で無くては取得できないそうです。和の本籍地は離れている為、現地まで行かなければなりません――久しぶりの帰省です。
電車に揺られて南へ。多摩川も越え、横浜駅も過ぎ――さらに南へ。持って来た本も読み終えてしまい、和はぼうっと窓の外を流れる光景を眺めていました。
川沿いにはマンションのような大きな建物が建ち並び、離れた丘の上にも住宅地が作られているようです。
和が生まれてからの短い時間でも、風景は大きく変わっています。
鎌倉へ到着し、和は下車しました。本来はもうひとつ先の逗子で降りるのですが、帰省することを連絡したら、こちらで待ち合わせる事を指定されたのでした。

改札を抜けて外へ出ます。夏の観光シーズンよりもまだ前の為か、人通りは然程のものではありませんでした。駅前のバス停にはボンネットバスがドアを開けたまま停まっています。

和は西日を避けて、駅の軒下で待つ事にしました。正確な待ち合わせの時間は決めていません。おおよその到着時間を伝えておいただけです。

待ち合わせの相手が父であるならば、時刻表などを見て正確な時間を求められるかもしれませんが――。

開け放たれていたバスの昇降口から人が降りてきました。

その和装の女性は和傘を開いて日避けにし、ゆらりと駅へ向かって――こちらへ歩いて来ます。その姿を和が忘れる筈がありません。

「――母さん」思わず和は駆け出していました。久しぶりに会う母。余り家に居ないけれど、姿はいつもよく見ている母。

「おかえりなさい、和」母は温和な笑みを浮かべ、和を迎えてくれました。「また大きくなったんじゃないかしら？」

「そんな事ないわ」和は笑います。暫く逢っていなかったからそう感じるのだろうと思いました。すぐ近くに容姿もスタイルも素晴らしい色羽が居る為、尚更そう思います。

「母さんと同じくらいよ」背丈はそのくらいでしょう。

「……そうかもしれないわね」何故か母は和の胸元へ視線を落として零しました。

「ええっと、ところでどうして鎌倉で待ち合わせだったの？」色々と察した和が話題を変えると、母も気を取り直したのか和傘の中に和を招き入れました。

「今日はお父さんもこっちに戻ってくるから、みんなでご飯を食べようかって」

「父さんも帰ってくるの？」聞いていなかった和は目を白黒させました。

「聞いてるわよ、お父さんにお仕事を頼んだんですって？」小町通りの方へ歩きながら母が訊ねてきます。

「それは、その……友達が困っていたから」思わず和は顔を伏せました。親とは云え、本職の人に無報酬で依頼をした事を咎められると思ったのです。

決して色羽がこちらを友達とは思っていないと不安になった訳ではありません。

「暇そうだったでしょう？」母は目を細めて笑いました。「頼られて嬉しかったってわざわざ電話してきたのよ、お父さん」

「そうなの？」和は目を瞬かせました。迷惑をかけた訳ではないようです。「余計な事に首を突っ込むなって叱られたわ」

「親だったら当然よ」母は再度笑いました。笑いすぎではないだろうかと口を尖らせると、ごめんごめんと母が和の頭を撫でてきました。

「心配するのは当たり前よ。……だけれど私もお父さんも、貴女の事を信頼しているから。……ただちょっと首を突っ込む勢いが強すぎる事が心配なだけ。……多分私に似たのだろうけど」

母は頬に手を当てて溜息を吐きました。和から見た母親はいつも和装で、落ち着いた物腰の女性です。舞台女優でもありますから、お転婆な役をする事もあるでしょうが、押しが強いと感じた事はありません。

……もしかしたら父に対しては強いのかもしれません。和はよく識りませんが、偶に父が怯えている事があるようです。

「――ああ、そうそう。今のうちに渡しておくわね」母は封のされていない茶封筒を差し出してきました。「え、これって――戸籍謄本？　でもどうして？　課題では私が取りにいかないといけないのに」

「東京じゃないんだから、土曜の午前中で窓口は閉まっているわよ」苦笑いを浮かべながら母は言いました。「役場での遣り取りは教えてあげるから、それで済ませちゃいなさい」

「あ……ありがとう」あのふたりが今日受け取りに行くと言っていた為、こちらでも大丈夫だと思っていた和は赤面して俯きました。

封筒から戸籍謄本を抜き出します。其処には和の――高城家の一家の名前が記されていました。

「……父さんって五男だから秋五って言うの？」「上のお兄さんは戦争で亡くなったそうよ」母の方には二女と書かれています。母の姉――上月家の長女について和は知りませんでした。同じように亡くなっているのかもしれません。

「――そういえば、逗子の家って母さんの実家なのよね」門柱には『上月』と云う表札が今でも掲げられています。

「お父さんの実家は遠いし、ほとんど縁も切れちゃっているもの」母はそう言いますが、父の姉妹と云う人が居る事は知っています。何をしている人なのかは知りませんが。

「あら――噂をすれば」背後に首を巡らせた母がくすりと笑いました。からんころんと下駄を鳴らす音が聞こえてきて、和も振り返ります。

通りを駆けてくる父の姿が其処にありました。今時風流な和装で、伸びっぱなしの髪を振り乱し。ふと気になって母に尋ねました。

「――どうして父さんは洋服を着ないの？」上野の事務所に居る時も、家に居るときも徹底して着物に袴なのです。

「ぷっ――」母が口元を押さえて吹き出しました。「……っご、ごめんなさい」和に向けて謝ってくるものの、俯いた母の肩は震えっぱなしです。

そうこうしているうちに父がすぐ近くまで来てしまいました。「母さん、どうしたんだ……？」父が不思議そうに和に訊ねます。

「な、なんでもないのよ」和が口を開く前に母が口を挟みます。

「さあ行きましょう？　私お腹すいちゃいました」そう言って母は父の背中を押して歩き出します。「あ、ああ……」戸惑いながらも父は頷きました。

並んで歩く両親を後ろから眺め、和は不意に気付きました。

「——そういえば、逗子の家って母さんの実家なのよね」門柱には『上月』と云う表札が今でも掲げられています。

「お父さんの実家は遠いし、ほとんど縁も切れちゃっているもの」母はそう言いますが、父の姉妹と云う人が居る事は知っています。何をしている人なのかは知りませんが。

「あら——噂をすれば」背後に首を巡らせた母がくすりと笑いました。からんころんと下駄を鳴らす音が聞こえてきて、和も振り返ります。

通りを駆けてくる父の姿が其処にありました。今時風流な和装で、伸びっぱなしの髪を振り乱し。ふと気になって母に尋ねました。

「——どうして父さんは洋服を着ないの？」上野の事務所に居る時も、家に居るときも徹底して着物に袴なのです。

「ぷっ——」母が口元を押さえて吹き出しました。「……っご、ごめんなさい」和に向けて謝ってくるものの、俯いた母の肩は震えっぱなしです。

そうこうしているうちに父がすぐ近くまで来てしまいました。「母さん、どうしたんだ……？」父が不思議そうに和に訊ねます。

「な、なんでもないのよ」和が口を開く前に母が口を挟みます。

「さあ行きましょう？　私お腹すいちゃいました」そう言って母は父の背中を押して歩き出します。「あ、ああ……」戸惑いながらも父は頷きました。

並んで歩く両親を後ろから眺め、和は不意に気付きました。

母が普段和装だからこそ、父もそれにあわせているのではないでしょうか。こうして見ていると、親ながらとてもお似合いのふたりなのですから。

……そう思っていたのですが、後日母に尋ねると、『ビックリするくらい洋装が似合わないから』と言われたのでした。（了）

エデンの少女

少女が目を醒ました時、眼前にあったのは広い大地だった。
青々とした草が生い茂り、風に揺れている。
緑の大地を裂くように、清水を湛えた川が流れている。
その向こうには林が見え、青空には白い雲がひとつ漂っていた。
少女は空を見上げながら考える。
私は何故此処に居るのだろう。
そもそも、此処は何処なのだろう？
一切見覚えの無い光景。
私がこれまで過ごしてきた何処とも違う、まるで異世界の風景。
もしかしたら、此処は本当に異世界なのかもしれない。
そう思ったのは、空から少女が降りてきたからだった。
少女は背中から伸びた翼で優雅に空を舞っていた。
どこからともなく、翼のある少女たち――天使が集まってきていた。
天使たちは水辺で寄り添いながら、互いに水を掛け合っていた。
少女はふらりと立ち上がり、天使たちの方へ歩き出した。
少女が近付いても天使は意に介さず戯れ続けている。
少女は川縁に立ち、水面をのぞき込んだ。
そこで初めて、少女は自らが真っ白な服を着ていることに気付いた。

一度も袖を通したことのない服だった。
まわりで遊んでいる天使と同じような綺麗な布。
濡らしてしまわぬよう気をつけながら両手で水をすくう。
まるで宝石の珠のようにきらきらと光っている。
口を付ける。
冷たい水が渇いた喉に染み渡る。
川縁の草地に腰を下ろし、少女は素足を川へ浸した。
冷たいせせらぎが足をくすぐる。
脚をばたつかせ、水しぶきをあげる。
まわりで遊ぶ天使たちは、少女に理解できぬ言葉をかわしながら笑う。
何も解らぬまま、少女は何時しか天使たちの輪の中に加わっていた。
もう服が濡れるのもかまわずに、両手ですくった水を掛け合う。
最初は驚いていた天使たちも、すぐに笑みを浮かべて少女へ水を掛けていた。
「ねえ、貴女」少女に向かって声が掛けられた。
少女が振り向くと、他の天使とはどこか違う雰囲気を持っている少女が川縁から手招きをしていた。
「どなた？」少女は訊ねる。
「私はメアリ」そう少女は名乗ると手を差し伸べてくる。

「ありがとう。わたしは――」そこで少女は気付く。
――わたしの名前は何だったかしら――
仕方なしに少女は首を振る。
「判らないのも仕方の無い事です」メアリはそう微笑うと、周囲を見回した。「私が名前を付けて差し上げましょう。そうね――」
メアリが川縁に咲く白百合に目を留めた。
「リリイにしましょう」
「リリイ――」繰り返し少女は付けられたばかりの名前を口にする。
悪くない、それどころかとてもよい名前だと少女――リリイは思った。
「ありがとう、メアリ」
「どういたしまして」メアリがリリイに抱きついてくる。
そのまま川の中へ倒れ込み、水しぶきがあがる。
リリイは水に浮かび、空を見上げた。
青い空に雲がひとつ、ぽっかりと浮いていた。

川から上がり、太陽の光を浴びていると白い服はたちまち乾いてしまった。
「ねえメアリ、此処はいったい何処なのかしら？」
隣で同じように陽の光を浴びているメアリに気になっていたことを訊ねる。

「此処はエデンと呼ばれています。永遠の楽園。争いも憎しみも、喜びも快楽もない世界」空を見上げてメアリは呟く。

「此処へは善人か、罪を償った人しか来ることが出来ません。だからリリイ、貴女はとても善い人なのでしょうね」

「わたしが善い人？」そうなのだろうか、リリイは疑問に感じた。

「実は、わたしは何も覚えていないの。名前と同じように、自分がこれまで何をしてきたのか、それを知りたいと思う気持ちすら喪われてしまったようなの」

「心配しなくとも大丈夫ですよ」メアリが微笑う。「エデンでは、過去の記憶も感情も、何も必要になる事はないのですから」

「そう――」リリイはメアリの言葉に頷いた。何か気になっている事があったが、それが何なのかが判らなかった。

忘れている――名前だけではなく、自分が何者であるかも、何をしなければならなかったのかも。

「難しく考える必要はありません。此処はエデン、役目を終えた魂が心落ち着かせる、安息の地」

リリイの心の内を見透かしたかのようにメアリが囁いた。

リリイがエデンの美しい自然の中で暮らすようになってしばらくが経過した。

　エデンには天候の変化と云うものが存在しなかった。いつでも太陽の目映い光が輝いていた。それでも草木が枯れ果てるような事もなく、いつまでも瑞々しさを保っていた。四季もない、穏やかすぎる世界。此処で暮らしている事に、もやもやとした不安をリリイは覚えていた。

　しかしそれが何故なのかは判らなかった。不安と云う漠然とした感覚自体、リリイには未知のものとなっていた。

「いったいどうすればいいのかしら?」リリイはメアリに相談した。

「何も悩む必要などありませんよ」メアリは優しく慰める。

「でも、自分のことが判らないのは気分のよいことではないわ」リリイは首を振る。

「そう――」メアリは頤に指を当て、しばし考え込む洞草を見せる。「自分を取り戻す方法がないわけではありません。でもそれは、エデンから出なければならないのです。一度エデンを出てしまえば、二度と戻れなくなってしまいます」

「それでも構わないわ。教えてメアリ、その方法を」

　メアリは答える前に空を見上げた。

「この空の向こう、ずっとずっと遠くにある星まで行けば、きっと貴女は自分を取り戻すことが出来るでしょう。でもそれには、長い長い旅をしなければなりません。他の多くの星へ立ち寄り、ひとつずつ自分を取り返していくのです。それはとても険しい道のり。楽園を喪ってまで行かなければならないものではないと思います」

「それでも行かなくてはならないのよ」リリイの決意は変わらなかった。

ヱデンの穏やかな暮らしに慣れてしまえば、この決断も消えて亡くなってしまうかもしれなかった。楽園で何も考えず——何も考えられずに生きるより、自分が何であるかを確認したかった。

欲望——ヱデンでは決して抱かれない、原初の感覚。

「私はメアリ。ヱデンの水先案内人。迷える魂を導くのが私の役割。だからこそ、迷えるリリイの御魂を導かねばなりません」そう呟くとメアリはリリイに向かって手を差し伸べた。

「参りましょう、リリイ。あなたの心を取り戻す旅路へ」

ふたりはヱデンでも一番高い丘の上に並んで立つ。

「この先にあるのが『あの星』です」メアリが指を天へ向ける。

「あの星?」「ええ、そう呼ばれています。其処へ向かうにはまず、ヱデンから一番近い『願い星』へ行かなくてはなりません。ただしヱデンから出るには、『焔の道』を通らねばなりません」「焔の道?」「ええ。認められた者しか通ることが出来ない炎に包まれた道。無断で通ろうとする不届き者はその身が炎で包まれてしまうのです」

「わたしは認められていないわ」リリイは首を振る。「心配いりません。私が貴女を認めましょう。旅人として、焔の道を通過できるよう」メアリがリリイの手を取る。

次の瞬間、メアリの背中から白い光が弾け出て、思わずリリイは眼を瞑った。
おそるおそる目を開くと、其処には白くて大きな翼が広がっていた。
「さあ、参りましょう」メアリはリリイの手を握ったまま翼を大きく震わせた。
ふわり、とリリイの身体が浮き上がる。振り落とされぬよう、リリイはしっかりとメアリの腕にしがみついた。
緑豊かなエデンの台地がどんどん遠ざかっていく。大きな川は青い線に、広大な森は濃い緑の塊に、草木生い茂る丘は緑の絨毯に。
辺りは暗くなり、沢山の星が見えるようになっていた。
メアリが羽ばたくのをやめ、リリイの手を放した。地面も何もない筈なのに、リリイの身体は宙に浮いたままだった。
「さあ、『焔の道』へ入りましょう」メアリは何も無いところで扉を開く仕草をする。
空が割れた。メアリの両手の間から炎が吹き出してきた。
紅く燃える空白が姿を現す。「さあ、参りましょう」メアリは再びリリイの手を握ると、無造作にその炎の中へ踏み込んでいった。
リリイは目を瞑り、迫り来る炎に耐えようとした。しかしリリイの考えとは裏腹に、ふたりの身体は然程の熱さも覚えず、するりと扉の中へ入り込んだ。
「認められた者が灼かれる心配はありませんよ」メアリが微笑う。
扉の中の『焔の道』は、外と何も変わることがないようにリリイには思えた。

「此処以外に、エデンを出る方法はないのですか？」

「『焔の道』を通らねば、その人は永遠に彼方と此方を彷徨する存在となってしまいます」メアリが虚空を指差す。「この星々の煌めきの中の幾つかは、そう云った魂の成れの果てなのです」

リリイは漆黒の空を見上げた。そこかしこに浮かばれない魂がある。

「さあ、全ての火が還る『焔の道』を抜けますよ」

そう言われねば気付かない程あっさりとふたりは『焔の道』を抜けた。

リリイは振り返った。何も変わらぬ漆黒の空が広がっていた。

エデンもまた、煌めく星々のひとつになってしまったかのように、小さく輝いていた。

メアリが翼を広げる。「急ぎましょう。『願い星』はまだまだ先です」

メアリの手をしっかりと握り、リリイはその身を彼女にゆだねた。

「あれが『願い星』です」近付いてきた大きな星をメアリが指差す。

「わたしは何をすればよいのかしら？」リリイはメアリに訊ねた。

「願いを伝えるのです。『あの星』へ向かい、何をするのかと云う願いを」

「どのようにして？」リリイの質問にメアリは答えなかった。

それも自分で考えねばならないのだろうか。リリイは首をひねるが、方策など全く思いつかなかった。

「願うのです」メアリが口を開く。「それだけが出来る唯一の事ですから」

「わかりました」リリイは頷き、目を瞑ってただ一心に『あの星』へ向かう理由――自らの心を取り戻すと云う事を願った。

「リリイ」メアリの呼びかけに目を開ける。そこは大地――いつの間にか『願い星』に降り立っていた。

「貴女の願いは『願い星』に届きました」メアリの言葉がリリイの耳朶を打つ。

「この星はまだ序盤、次からが本当の試練となります」「試練?」

「貴女の心を取り戻す為、貴女の感情を呼び醒ます為、貴女の身に辛い事が起こるかもしれません」メアリは淡々と告げる。「それでも尚、この先の星――『喜の星』へ進みますか?」「ええ、勿論です」リリイは力強く頷いた。『願い星』に認められた以上、引き返すことなど出来なかった。

「今ならばまだエデンへ戻る事も出来るのですよ」メアリはそう告げてきたが、リリイの決断を翻すことが出来ないと悟ったようだった。

「ならば参りましょう。喜びを生み出す『喜の星』へ」

天使の翼が大きく羽ばたかれ、ふたりの身体は『願い星』から飛び立った。

漆黒の空をふたりで舞う。

「ねえメアリ」リリイはメアリに話し掛けた。

「『喜の星』は喜びを生み出すのでしょう？　それがどうして試練になるのかしら？」
「なるのです」メアリは言葉少なにそう答えた。
　説明になっていない。さらなる言葉を求めてリリイが口を開き賭けたその時、メアリは翼の羽ばたきをやめた。
「さあ、ここが次の『喜の星』です」青い星にふたりは降り立つ。
「此処ではどうすればよいの？」リリイが訊ねる。しかし返事はなかった。
「メアリ？」リリイが振り返った先に彼女は居なかった。見回してもメアリの姿は無く、広い大地にリリイひとりが取り残されていた。
「何処へ行ってしまったの、メアリ？」幾ら呼びかけてもメアリは姿を現さなかった。
　急激に不安になる。このような何があるかわからない地に残され、何をするのかもわからない。周りには何も無い。森も川も、大地に草も生えていない。凹凸すらない、平坦な台地。「ねえ、メアリ――」リリイの声すら虚空に消えてしまうようだった。
　リリイは膝を抱え大地に座り込んだ。メアリを捜しに向かうにも、何処へ向かえばいいのかわからない。動きようがなかった。
　孤独。それはとても身近な感覚だった筈なのに、こうして何も無い処に取り残されると、改めてその辛さを感じられる。
　どのくらいリリイはそうして居ただろうか。空腹も睡魔も喉の渇きすらも無く、ただ凝とメアリが現れるのを待ち続けた。

もしかするとメアリはわたしを此処へ置き去りにしてしまったのかもしれない。自分を取り戻す為エデンを出ると云う決断を彼女はずっと反対していた。だから愛想を尽かしたのかもしれなかった。

涙に濡れた貌を上げる。空は一点の曇りも無く、ただ蒼かった。

その中に黒い点が浮かび上がった。それは見る間に大きくなり、音を立ててリリイの眼前に落ちてきた。

メアリの首だった。

うつろな目がリリイを見上げている。

「メアリ？」呼びかけても無駄だった。

「あ、ああ！」リリイの眼からぽろぽろと涙がこぼれ落ちる。

こんな理不尽にひとりにされてしまうなんて。

これからどうしたらいいのか全く見当もつかないのに。

わたしはこのまま、この何も無い星でひとり生きていかねばならないのか。

どうしよう。

どうしよう。

零れた涙は、たちまち地面に吸い込まれていく。

この涙で大地が潤うのならば、この地で過ごしていく事ができるかもしれないのに。

不可能なことを考えながら、リリイはメアリの頸の前で泣き続けた。

そうしてどのくらい経っただろう。目の前にあった筈のメアリの頸はいつの間にか消え去っていた。
今まで感じたことのない孤独に、リリイの心は張り裂けそうになる。
「ああ、お願いメアリ！　どうか此処に来て、わたしを導いて！」
リリイは虚空に向け、声を限りに叫んだ。
凪すら吹かぬ大地に言葉が吸い込まれていく。
すると、空の真ん中に黒い点がひとつ浮かび上がった。それは見る間に大きくなり、音も立てずにリリイの前に降り立った。
「ああ！　ああ、メアリ！　会いたかったわ、メアリ！」リリイはメアリに抱きついた。
「御免なさい、リリイ」メアリがリリイの頭を撫でた。
「戻ってきてくれて嬉しいわ」リリイは涙を拭う。「こんなに嬉しい事はないわ」
「『喜の星』の試練を乗り越えたようですね」メアリが微笑んだ。
「辛い事を乗り越え、貴女には喜びの感情が戻りました。さあ次の星へ参りましょう」
「待って、メアリ」不安を感じ、リリイは先へ行こうとするメアリを呼び止めた。
「この後もこのような試練が待っているの？」
「ええ。それこそが自分を取り戻す為にせねばならぬ事ですから」メアリが頷く。
「貴女はその覚悟を持って望んでいる筈です。厭であれば、今からでもエデンへ帰りましょう」

「暇ではないわ」リリイは首を振る。「行きましょう。わたしを取り戻す為に」
メアリに掴まり、『喜の星』を後にする。
「次に向かうのは『怒の星』。貴女の心に怒りの感情を取り戻しましょう」
「それはどうしても必要なものなの？」リリイには理解できなかった。怒りの感情など必要ないように思えた。
「怒りの感情とは、そのまま何かを為すべき力となります。強さを生み出す為に必要なものなのですよ」
そう言われては納得するしかなかった。
赤い星が見えてきた。メアリは羽ばたくのをやめ、リリイを前に押し出した。
「さあ、参りましょう。貴女に怒りの感情を取り戻す為に」
背中を押され、リリイは数歩蹈鞴を踏んだ。振り返るとすでにメアリの姿は無く、いつの間にか赤い大地の上に立っていた。
「メアリ？」呼びかけてみるがやはり返答はない。早々に諦め、リリイはあたりを見回した。
赤い大地に黒い道が一筋続いていた。此処を歩けと云う事だろうか。
リリイは足を踏み出した。道は黒い砂が敷き詰められているようだった。
さくさくと小気味良い音を立てながら道を歩く。

『怒の星』と云う名であっても、今のところその兆候は見られなかった。
何処まで歩いても景色は変わらない。ただ赤と黒の世界。空も夕暮れの様に赤かった。
もしかしたら反対側へ行かなければならなかったのかもしれない。そうだとしたらとんだ徒労だ。
リリイは黒い砂を蹴った。ざっ、と音を立て、砂が飛び散る。
もしかするとこれが『怒の星』の試練なのだろうか。リリイはそう考えて怒ろうと思ったが、どうしても怒る方法が解らなかった。
「どうしたらいいのかしら」頤に手を当ててリリイは考え込む。怒った事などない——少なくともそう云った記憶はない。
そもそも、怒ると云うのがどういった状態を指すのかも解らない。
「おかしいわ」疑問がわき起こる。先程までは、怒りと云う感情は必要のないものだと感じていた筈なのに。
頭が痛い。
リリイは地面を蹴りながらその痛みを鎮めようとする。
砂が飛び散る。
「ああ、もう！」怒りと云うものが解らないせいでいらいらする。
地面に座り込み、黒い砂を掴んで辺りにまき散らす。
「早く来てちょうだい、メアリ」何も無い空に向かって呼びかける。

しかしもちろんのこと、返事は何もなかった。
「もう！」リリイは地面に仰向けに寝転がった。
何も無い空が広がっている。それすらも今は腹立たしく思えた。
「リリイ」メアリの声が聞こえた。
「遅いわ、メアリ」身体を起こし、リリイは口を尖らせた。
「ご免なさい」メアリが頭を垂れる。
「こんな何も無い処にひとりで居て、何をすればいいのかも判らないのよ？」
リリイはメアリにくってかかる。
「その様子だと、怒りの感情を取り戻したようですね」メアリの言葉に、リリイは目を白黒させた。「どう云う事かしら？」
「今貴女が私に対して抱いている感情こそが怒りです」メアリは目を伏せた。
「これが怒り？　そうだとしたら、やっぱり必要の無いものだわ。こんなに気分の悪い感情はないもの」リリイは首を振った。
「ですが、怒りにまかせた言葉が私を呼びよせたのですよ。怒りはそのまま力となるのですから」
「解らないわ」リリイはまた首を振る。「でもこれで、次の星へ行けるのでしょう？早く行きましょう。次はどんな星なのかしら？」
「次は、『哀の星』です」伏し目がちにメアリは呟いた。

「『哀の星』では、貴女に悲しみの感情を取り戻していただきます」
「悲しみ?」言葉の意味は判るけれど、それがどう云うものだったかは解らなかった。
「さあ、参りましょう」メアリがリリイの手を取り、翼を広げた。

暗い空へ飛び上がりしばらく往くと、新たな星が近付いてきた。
「あれが『哀の星』かしら?」メアリに訊ねる。「ええ、その通りです」
空から見た『哀の星』は、雲で包まれているかのように白く、何も見通せなかった。
「さあ、悲しみの感情を取り戻しに参りましょう」メアリはリリイの手を引いたまま、雲の中へ入っていった。
雲の下はまるでエデンのような、穏やかな世界だった。
このような場所で悲しみと云うものがあるのだろうか。
草原にふたりは降り立った。
「悲しみとは、多くの場合喪失感からもたらされます」メアリが説明する。
「ですが貴女の場合、既に多くのものを喪失しています。これ以上何かを喪う事は難しいでしょう」
「わたしはどうすればいいのかしら?」リリイが疑問を挟む。
「私が居なくなったからと云って、貴女が喪失感を得る事はないでしょうね」メアリは貌を伏せて微笑む。

「もう少し此処に居ましょうか」メアリが草地に腰を下ろした。

「どうして？　わたしは早く自分を取り戻したいのに」そう云いながらもリリイはメアリの隣に腰を下ろす。

「次の星ではとても大変な試練が待っていますから」メアリが下を向く。

「それでもわたしは行かなければならないの」リリイはメアリの手を握った。

「強くなりましたね、リリイ」メアリが貌を上げ、リリイの眼を正面から見つめた。

「ええ、それも全てメアリのおかげ」喜怒哀楽を取り戻したリリイは、そうメアリに向け微笑んだ。

「でもこれだけでは足りないのかしら？　わたしはすでに、人の感情を取り戻したと思うのだけれど」リリイは首を傾げた。

「まだ必要なものがいくつか残っているのです」メアリはまた目を伏せてしまった。

「これから何があるのかしら？」リリイは訊ねる。

「不要だと思われるものも、人を更生する上で必要になるのです。次の『悪の星』では、あらかたの感情を取り戻した貴女にとってとても辛い試練になるかもしれません」

「『悪の星』ですか？」なんだろう、とても厭な予感がする。

「それでは参りましょうか」メアリが立ち上がる。

「待って、メアリ。何があるのか教えてちょうだい」リリイはメアリの腕を掴むが、そのまま立ち上がらされてしまう。

「何があるのかは、実際に見て感じる以外説明できません。それが『悪の星』なのですから」
表情を変えること無くメアリはそう呟いた。
空を飛びながらリリイはこれから向かう『悪の星』について考えていた。
禍々しい響きがある言葉のように思うのだが、具体的に何が起こるのかはさっぱり判らない。
今までの星で起こった事を考えれば、それはリリイに悪の感情を取り戻させると云う事なのだろう。
そんな感情は必要なのだろうか。そもそもそのような感情を持っていたのだろうか。
黒い星が見えてきた。
「あれが『悪の星』です」メアリが指差す。
「なんだか恐ろしい処みたい」リリイはメアリの腕にしがみついた。
「貴女が自分を取り戻す為には必要な事ですよ」メアリはリリイの肩に手を掛け、『悪の星』へ向かせた。
「さあ、参りましょう」
メアリに導かれ、リリイは『悪の星』へ降り立った。
黒一色の星だった。

地面も空も、空気までも黒いようだった。
身体が重く感じる。
すぐ傍に居たはずのメアリの姿も見えなかった。
「メアリ？」呼びかけはするが、無駄だと云う事もリリイは解っていた。
しかしこのままでは動くことも出来ない。
リリイは早々に何かすることを諦め、その場に座り込んだ。
試練は向こうからやってくるだろう、そう考えてのことだった。
凝と待っていると、徐々に眼が慣れてきて周囲が見える様になってきた。
それでも黒い星は見た目が何も変わらない。
遠くに朧気ながら人影が見えた気がした。
「メアリ？」呼びかけると、その人影はリリイに向かって近付いてきた。
近付いてくるにつれ、それがメアリで無い事が解った。
見たことの無い少女だった。
「どなたかしら？」リリイは呼びかける。
「わたしはあなた」少女が答えた。
「わたし？」リリイは首を傾げた。
どうしてわたしが目の前に居るのだろう。
「わたしはあなたの悪の心」少女はそう告げてくる。

「あなたがわたしの悪の心？」鸚鵡返しにリリイは訊ねた。
「そう。だからわたしはあなたを殺すわ」少女は左手に大きな鉈を持っていた。
「どうしてわたしを殺そうとするの？」リリイはなおも訊ねる。
「そうすることが、わたし自身を証明する手段だから」少女が鉈を振りかぶる。
「わたしを殺せば、あなた自身を証明する事になるの？」
ならば、リリイが自分自身を証明する為には、目の前の少女を殺さねばならないのだろうか。
少女が持つ鉈が振り下ろされる。リリイはそれをすんでの所でかわした。
再度鉈を振り上げようとした少女の腕を掴む。
ぞっとする程冷たかった。
鉈が黒い地面に落ちる。
リリイはそれを拾い上げた。
この黒い世界の中で、ただひとつだけ鈍色の無骨な刃。
無造作に振り上げ、少女の頭の上に振り下ろした。
刃が少女の頭に食い込み、黒い血が噴き出す。
黒い骨が割れ、黒い脳漿がこぼれ落ちる。
黒い地面に斃れた少女を見下ろす。
この少女は、自分をわたしだと言っていた。

ならばこの死体はわたしのものなのだろうか。

だとしたら、わたしはいったい誰なのだろう？

「リリイ」メアリの声が聞こえてきた。

リリイは鉈から手を放し、声のした方を振り返る。

悲しそうな貌をしたメアリがそこにいた。

少なくとも今のリリイには、それが悲しげな表情である事が判った。

「どうしたの、メアリ？」リリイが訊ねる。

「いいえ、何でもありません」メアリが小さく頭を振る。「悪という概念を取り戻したようですね」

「そうなのかしら」リリイにはまるで実感が無かった。前と後とでは、何も変わりがないような気がしていた。

「次へ参りましょう」メアリがリリイの腕を掴む。「次は『善の星』となります」

「ええ、行きましょう」黒い『悪の星』らら一刻も早く抜け出したくて、リリイは早々に頷いた。

次の『善の星』は、『悪の星』のすぐ隣にあった。

白い光が星を包み込んでいる。お陰で『悪の星』はほとんど見ることが出来ない。

「此処ではどうしたらいいのかしら？」メアリに訊ねる。

「今までと同じです。善の心を取り返す為、貴女は試練を受けねばなりません」
白く輝く『善の星』へふたりは降りていく。
真っ白な砂が敷き詰められた大地。
日差しを遮るものが何も無くとも、暑さはまるで感じなかった。
善の心を取り返すとは、果たして何をすればよいのだろうか。
またメアリは居なくなっている。
あたりを見回していると、遠くに白い人影が見えた。
あれがわたしに善の心を取り戻させてくれる人なのだろうか。
リリイもまた、その人影に近付いていく。
見たことの無い少女だった。両手で何かを抱えている。
「あなたはどなた？」リリイは訊ねる。
少女はその問いに答えず、抱えていたものをリリイへ向けて差し出してきた。
両手でやっと持つことが出来そうな大きな石だった。
「これを持てばいいのかしら？」そうリリイが訊ねると、少女は有無を言わせぬ強引さで石をリリイの腕に押しつけてきた。
石を抱え持つと、ずしりと重みが感じられた。
「お願い」そう聞こえた気がした。
リリイが貌を上げると、石を持っていた少女は消え失せていた。

何をお願いされたのだろう。リリイは重い石を抱えたまま考える。
これを持っていればいいのだろうか。それとも何処かへ運ぶのだろうか。
頼まれた以上、その辺りに捨て置くわけにもいかないだろう。
リリイは少女がやってきた方角、その逆になる進行方向へ身体を向けた。
とりあえず歩いてみよう。
リリイは石を抱えたまま歩き出す。
すぐに腕が痛くなってきた。
歩けば歩く程、石が重くなっていくような感じがした。
事実、石は徐々に大きくなっているようだった。
投げ捨ててしまおうか、リリイはそんな事も考えた。
こんな石塊を運んだところで何の意味も無いだろうに。
しかし石を捨てようと思うたび、先程の『お願い』と云う少女の声がリリイの頭に響いた。
捨てようと思いながらも捨てられず、リリイはあても無いまま歩き続けた。
どのくらい歩いていただろうか。「リリイ」と呼ぶ声に足を止めた。
「メアリ」振り返るとメアリが其処に居た。
「それを渡していただけますか」メアリは石を指差した。
「渡してもいいのかしら。これは頼まれたものなのに」

「『夢の星』はどこかしら？」リリイは首を巡らす。
「あちらの小さな星です」メアリは『あの星』の傍に浮かぶ星を指差した。
「『夢の星』には『薔薇の女神』と云う方がいらっしゃいます。彼女が最終的に『あの星』へ降り立つ許可を与えてくれるのです」
豪勢な名前の割に、その『薔薇の女神』が居る『夢の星』は小さく、色もくすんでいるように見えた。
「その『薔薇の女神』と云うのはどのような方なのですか？」
「この星々を統べておられる方ですよ。『薔薇の女神』に認められなければ、今までの苦労も全て水の泡となってしまいます」
メアリはリリイの背をそっと『夢の星』の方角へ押し遣った。
「行ってらっしゃい、リリイ。最後の夢を取り戻す為に」

リリイを最後の星へ送り出し、メアリはほうと息を吐いた。
これで自分の役目は全て終わった。
彼女は途中で諦めるものだと思っていた。
自分自身を取り返すと云うのは、とても辛く、難しいものなのだから。
メアリは自らの胸に手を当てる。
私もかつては——

「カッテハドウシタンダイ、めあり?」
何も無い空間に突如響いた声。
メアリは驚いて振り返った。
兎の人型——否、兎の姿をした門番が立っていた。
「貴方は——」忘れていた記憶が黄泉還る。
大切な友達。
死出の旅すらも共に進もうとした、メアリの大切な友達。
「りりいハ『アノ星』ニ還レナイヨ、めあり」兎の門番が無機質な眼を『あの星』へ向ける。
「どうして? あの子は人間としての感情を取り戻したわ。『あの星』で復活する資格は充分に満たしている筈よ」
「本当ニ忘レテシマッタンダネ、めあり」兎の門番が髭を震わせる。
「りりいハめありノ現シ身ナノニ。めありが行ケナカッタゑでんニ遣ワサレタ、全テヲ喪ッタモウヒトリノめあり」
「でも私は、確かにエデンに居たわ。そこでリリイと出会って、ここまで——」
「還ロウめあり。全テヲ忘レレバゑでんハ受ケ入レテクレルヨ。キミダッテズット、ソウ望ンデ居タジャナイカ」
だから私は、リリイが自分を取り戻す事を憂いて居たのだろうか——

自ら命を絶つと云う、決して赦されざる罪を背負った私を――

「そうなると、リリイはどうなってしまうの？」

私自身はどうなっても構わない。

彼女だけは、試練を乗り越えてきた彼女だけは――

「ドウモナラナイヨ。元々存在シナイノダカラ」

かつては大切な友達だった兎の門番が槍の鋭い穂先をメアリに向ける。

「大切ナキミヲコノママニシテハオケナイカラ」

「ありがとう、――」メアリは親友の名前を呼んだ。

還ろう――全てを忘れ、何もかもが穏やかに過ぎる、争いも憎しみも、喜びも快楽もない永遠の楽園へ――

メアリは兎の門番に手を引かれ、虚空に現れたエデンへと繋がる門へ足を踏み出した。（了）

彼女と手紙

Letter with Beatrice.

令和2年 12月25日 発行

著者　鈴鹿美弥
　　　作者未詳

発行者　Innocent Grey

発行所　有限会社グングニル

印刷・製本　株式会社エモーションプラス

［引用］ 神曲　LA DIVINA COMMEDIA　ダンテ アリギエリ　山川 丙三郎訳